

1990年7月号

1990年7月5日発行（毎月1回5日発行）

№160

あんふぁんて

発行人/ 発行所/あんふぁんて出版部
定価/500円 振替口座/ あんふぁんての会 電話/

うちの娘

うちの娘はもうすぐ三歳
といってもまだ二ヶ月も在るけれど
ひっこみじあんで内弁慶
したがって友達も少ない

なんで私にこうも似るのかな
それは、親子だから
違う違うそれは環境だよ？！

病気がちで病院通い
公園も御無沙汰してる
たまにみんなの中に入ってみれば
“どうしよう”とろろろしてる

みんなに遊ばせて言えばいいのに
仲間にいれて言えばいいのに
言えずにいつも一人でボツリ
その気持ち私もとてもわかるけど
みんなと仲よく遊んでほしい
それが母の願いです。

詩 高橋
イラスト 小山

逐次刊行物

〒2年 7.18

国立婦人教育会館
婦人教育情報センター





十年経てば四十三才。子どもは中二を頭に最低三人。きつと美容院などやはり行く間もなく、眉間に深いしわを作って一日中眠っている夫を横目に子ども達を怒鳴りちらして、いや叱咤激励していることでしょう。あー。と言うのも、子育てに一段落出来る時にはすでに四十才は目の前。今から考える事は、四十才に何が出来るか。または、子どもがいても出来る事は何かです。専業主婦だって社会の一員ですよ、きつと。

手とり早い方法は復職すること。さて、その時カビの生えた教員免許を使えるほど体力残っているかしら。周囲はどうでしょう。自分の中で納得いくかしら。やはり他を捜してみよう方が良くないかナア……

あと十年間で考えてみましょう。四月号にもあったように、出会いを大切に。自分を磨いて。の二つですね。おっくうがらずにガンバリましょう。

「わたしね、大きくなったら、やおやさんになるの。だって、いちご売っているから。いちごやさんになりたいんだもん。おかあさんは、大きくなったら、何になるの？」

「……おかあさんはもう大きいけど……何になろうかしらね？」

「おかあさん、もう大きい？ でも何になるの？」

「……（「おかあさんになった」とは言いたくない）」

四才になる娘との会話。情けない。

「明日こそ何とかしなくちゃ！早く何とかしなければいけない！何とかしなくちゃ、つまらない！」——そう言い続けて十年がすぎこのまま行くと十年先もこう叫んでいるだろう。先日、朝日新聞の「ひととき」コーナーに、五十三才の女性がやはり同じように書いていた。更に彼女は「この年齢になった時にこんなこと言っていないようにと、若い頃から、いろいろやってきたつもりだったのに、結局、形になって何も残っていない。これだけとは自信を持ってやれるものが何もない」と続ける。そして「明日こそ何とかしなくてはいいけない」と結ぶ。彼女はまさしく「二十年後の私」だと思った。

私の行動にブレーキをかけているのは、まず膠原病という病気、もう二十年以上付き合ってきた。死ぬまで縁は切れない。確かに、何かをやろうとすると、もしくは何かを始めると、病気が出てきて中断されてきた。この頃では「もしかすると途中でだめになるかも



「これだ！というものがみつかるとは思っていませんが、やはり行動しないことには始まりません。そんな私の助言者はないと「あんふぁんて」でした。（別に私は「あんふぁんて」の宣伝マンではありませんが）私にとって毎月届く「あんふぁんて」は社会の色々な問題を気付かせてくれる、様々な視点を示してくれるテキストのようなものです。そして入会して六年もたつ今まで共感したことはたくさんあったのに、ただ「そうよねー、それは問題だわ」と「そういう行動を確かにすべきだなあ」と思っているだけでなかなか行動できませんでした。でも、世の中って一人一人が少しずつでも働きかけないとちっとも変わらない、少数の人間の都合のいいようにしかならない、とこのごろつくづく感じています。私も働きかける一人になろう、声を出して意志を示そうと思います。そして十年後、「世の中、ちよつとは良くなったんじゃない？」と言えたらいいな！

「……（「おかあさんになった」とは言いたくない）」

四才になる娘との会話。情けない。

「明日こそ何とかしなくちゃ！早く何とかしなければいけない！何とかしなくちゃ、つまらない！」——そう言い続けて十年がすぎこのまま行くと十年先もこう叫んでいるだろう。先日、朝日新聞の「ひととき」コーナーに、五十三才の女性がやはり同じように書いていた。更に彼女は「この年齢になった時にこんなこと言っていないようにと、若い頃から、いろいろやってきたつもりだったのに、結局、形になって何も残っていない。これだけとは自信を持ってやれるものが何もない」と続ける。そして「明日こそ何とかしなくてはいいけない」と結ぶ。彼女はまさしく「二十年後の私」だと思った。

私の行動にブレーキをかけているのは、まず膠原病という病気、もう二十年以上付き合ってきた。死ぬまで縁は切れない。確かに、何かをやろうとすると、もしくは何かを始めると、病気が出てきて中断されてきた。この頃では「もしかすると途中でだめになるかも

特集

十年後の私

私が世の中変える？！

梅田

子どもは日々成長していく。生まれてからの一年は指折り数えて、子どもの成長を待っていたのが二才近くなると親以外の友を求め、幼稚園に行くころには親の知らない世界を持ち始める。そんな成長に喜びを感じつつも、我が身を振り返るとなんと不安な気持ちになる。もう十年もたてばこの子等は、自分の人生の足がかりを見つかけようとしているだろうに、私たちは？

十代のころ夢はいくらでもふくらんだ。二十代のころまだ可能性を信じていた。そして結婚し子どもを持つ今、様々なしがらみとまどっている。しがらみの中で動き出せない自分がいる。そんなこんな迷いの中で、これからちよつと考えてみようじゃない？「十年後の私」というわけです。

下の子が幼稚園に行き始めて、「一人」で行動できる時間が増えました。

今まで我が子べったり過してきた七年间がそれほど苦痛だったわけではなく、むしろ一緒に楽しむことが多かったのに、「二人」で行動できる解放感に相当のものです。テニスをしたりゴルフをしたり、主婦同志のグルメ昼食会など、日程調整に苦労しつつもルン気分にはひたっていました。

しかし、日々の時間は楽しく過ぎては行くが将来へ続く何かがない、私はこんな風に時間を消化して行くだけでいいのかしら？、このままで何が残るのだろうか。不安な気持ち、あせりの気持ちがジワリジワリとわいてくるのでした。ウーン、せめて十年後の自分を考えて行動したい、ライフワーク的な「何か」をみつけない、一年たつて切実にそう感じました。この「何か」探しは難しい、簡単



にこれだ！というものがみつかるとは思っていませんが、やはり行動しないことには始まりません。そんな私の助言者はないと「あんふぁんて」でした。（別に私は「あんふぁんて」の宣伝マンではありませんが）私にとって毎月届く「あんふぁんて」は社会の色々な問題を気付かせてくれる、様々な視点を示してくれるテキストのようなものです。そして入会して六年もたつ今まで共感したことはたくさんあったのに、ただ「そうよねー、それは問題だわ」と「そういう行動を確かにすべきだなあ」と思っているだけでなかなか行動できませんでした。でも、世の中って一人一人が少しずつでも働きかけないとちっとも変わらない、少数の人間の都合のいいようにしかならない、とこのごろつくづく感じています。私も働きかける一人になろう、声を出して意志を示そうと思います。そして十年後、「世の中、ちよつとは良くなったんじゃない？」と言えたらいいな！

十年後は老人問題と土地問題？

十年前、私は一才の長女の子育てに追われていました。初めての育児に気負い、神経を使い、これでいいのかわからない不安やあせりを感じていた時、あんふぁんてと出会ったのです。それから十年、あんふぁんては自分の生活と切り離せないものになり、娘たちも十一才と四才に成長。さて、これからの十年は今まで以上に自分のために使いたい。この原稿を書き始めた矢先、彼の父が亡くなり、また、葬儀を終え、あれこれ雑用を片付け、ようやく落ち着いたところ。残った母は、当分の家で一人暮らしをすることにしました。でも、十年も経ったら一人でやっていけるかどうか？

今まで自分の将来を考える時は、自分と子どもとの事を考慮すれば充分でした。私達二人の理想とするライフスタイルはおおむね一致していたので、あとは健康の心配をすること、自分のやりたいことをどうやったら実現できるか、思案することくらい。ところが今から十年後は……

十年経ったら四十代半ば。自分達の身体だつてがたがたしているのに、まわりには高齢者がずらり。しかも親を引き取りたいと思つても、場所もお金もありません。都心の親の土地を売って郊外に引っ越すケースも考えられませんが、そうすると今までの生活をガラリと変えねばなりません。通勤に不都合だったり、子どもたちだって学校を変わらねばならなくなります。以前、あんふぁんて誌上に、転勤族の妻はせっかく自分の生活を築いても、紙き

れ一枚でとばされまた一からやり直し」と嘆く声が載っていました。転勤族ではないんですけどね。

世田谷区では自分で家を持ってない若い人達のために親が二世帯・三世帯同居の住宅を建てるため、人口が増加していると聞きました。私達は、親に自分達の家を丸ごと用意してもらおうなんて考えませんでしたし、親たちも子ども達の世話になろうなんて思いません。でも、一人暮らしが危ない状態になったら放っておけないのも事実です。国の福祉政策はなっていない、老人を家族に押しつけるだけ。そんなのとおかしいと思いつつも、現実には迫り来る我が家の高齢化時代に、気が重くなるのでした。

☆ ☆ ☆

こういうテーマを与えられて、面白い見通しの文を書けるのは十代からせいぜい二十代前半だろうか。子どもの頃私達は「希望」という名のつく風船をいくつもいくつも持っていた。しかし、風船が似合わなくなる年齢につれて、「希望風船」もひとつ、またひとつとしぼんでいく。全部しぼんだなから、たつたひとつでも、例え元の大きさの半分でもいいから、もう一度、ふくらまそうとあがく。そして、落ちてしまった肺活量を嘆くのか。

今回の特集に寄せられた文の内容は、現状打破を、十年後の自分自身の変化のみによって行おうとするものと、家族を含め、自分を取りまく社会状況の行く末を憂うものの二つに大別されるようだ。今の自分及び置かれている環境に多かれ少なかれ不満がある人は、



何とかして、そこから脱出したいと模索する。逆にある程度以上、満足している人は、豊かな社会とそれ故のひずみに目がいき、その将来に不安を感じるのだと思う。

今、飛び立てないものは、この先もやはり同じだと思う。「子育て」は昇解で理由にはならない。夫を始め家族の理解が必要だ。しかし、これは行動をおこしてから後に、話していけばいい。相手だって、その場にならないうと対応できないと思う。きつかけをとかむこと、いや、何をきつかけにするかという捨てていくかという。それと、何と何を切り捨てるかという。この場から抜け出るには拘束からの解放が必要だと思う。

小三の息子が「おかあさん、つまらない？つまらない顔してる」と言った。これから先身も心も焼き尽くすような恋をすれば家庭崩壊を引き起こすだろう。健康と老後を考えるとして、「つまらない顔してる」と指摘した息子のことを思うと、十年後、大恋愛していることもなさそう。

今が見えてこないから、十年後に夢を託して、この特集を組んだはずなのに、どうも逆の方向に展開してしまったようだ。さて、あなたの十年後は？

(梅田・小山・佐竹・高橋・増田)

十年後の私

増田

このテーマを与えられてペンをとったところ、少々私は慌てた。何故なら具体的なイメージが少しも湧いてこなかったからだ。このままではいけない、何かしなければ、といつも思っているくせに何もできないでいる現在の私。こま切りの時間がうまく使えないせいで結局あつというまに終ってしまふ一日の連続。最近ではあきらめることばかりうまくなつてしまつてまいいか、なんて。

誰かの言葉で「考えることから何も生まれない。先ず行動してみること」とあつた。とにかくやってみよう。がむしゃらに行動しているうちに何か見えてくる筈。とはいっても先の見えない旅は辛い。あれやこれやと悶々としているうちに確実に年だけはとつていく怖しさ。

たった一人の子どものためにこんなに振り回されて全く情けないなあ。他の人たちはどうやっているんだろう。果てしのない毎日の家事と子どもの世話、主婦の顔と親の顔という二重を使い分けて、いつ自分の顔を取り戻すんだろう。こんなこととして毎日を駆け抜けているうちに十年なんてあつというまに終ってしまふそう。しつかり年だけはとつてそれなりにわけ知り顔のおばさんになっていたりして。これからの楽しみといえは子どもの入園、入学式、何を習わせてどういう学校に行かせるか、とか。いつのまにか子どもに自分の生を添わせてしまつていく。それが女性として生まれてきた以上、当たり前のことなのか。余計なことを考えずに良き妻、母を演じてい

る方がよっぽどこの世は生き易そう。五年後、十年後の自分の生活設計を立てようとしても、あいだに夫の転勤があるかもしれない、子どもが病気になるかもしれない、親が倒れるかもしれないetc、何やかや。どうしても女性としての状況に左右されて自分の想いを貫き通せないのか。結婚という我が人生最大の失敗(?)をしてしまった以上、あきらめるしかないのかしらん。

結婚、出産によって自分の人生が二倍、三倍になる筈だったのにこのままでは、倍になつてしまふそう。とにかくゆつくりと考える時間もない今、十年先は霧の中、私のなかのイライラは当分続きそう。



砂漠化、飢え、病気といった、今日世界のどこかの国での日常が、日本にも訪れるかもしれない。だって、たった四十数年前は少なからずそうだったし、昔から繁栄の後は、没落と相場が決まっていた。私は決して宗教信仰家ではないが、それが自然の節理というものだと思う。私が描く未来は、明るく希望に満ちあふれたものではない。

さて、私個人はと考えると、これも明るくないから困ってしまう。もともと楽天安なだけでいい。私は自分の健康に自信がない。十五才の時入学式に一度しか会わなかったクラスメイトが、たった二ヶ月でガンの為に亡くなった。自分もいつかは死ぬという事に気づかせてくれた出来事だった。それまで、自分が死ぬなんて考えてもみたことはなかったから。私が未来を思う時、常に人生の終りを頭に入れるようになった。子どもがでると自分が不測の事態になったら、この子はどくなるだろうと考える。この子の父親は、「私が〇〇になったら」この先を考え、答えを出してくれと思う。私はどうなつてもいいと思わないが、これが逆だったらどうだろう。天には悪いが、「彼が〇〇になったら」私は考えられるだろうか。そして答えを出すだけの力があるだろうか。十年後夫は四十二。世間では、一番危ないといわれる年齢になるし、若い頃の大病もあるし、食べない、寝ない、忙しいの典型的な会社人間の生活では、その可能性はあつてもおかしくはない。

あと十年間、それだけの答えを出せる人間になつていたい。

三・四月号を読んで
呉市

広島特集、広島についての感想があんなにもそろったというのにはオドロキ！でした。そして、そんなものかとひと安心。十年くらいしたらはてさて広島人になれるのかしら？とも考えてしまいました。

呉沖の海上弾薬備蓄の件は、米軍側からそのような計画はないとの回答が出されたそうです。要するに紙面での計画だったらしいです。特に平和運動だなんだというのではなく、一市民として環境権みたいなものを主張したくなる出来事でした。

四月号は「グループと個人」ということでしたが、グループと言えは学校生活時代のグループ・班長・集会・皆一緒にを思い出しました。この中でも、「皆一緒に」というのが大嫌いだっただけです。それは自分達の中から出た言葉ではなく、皆一緒にをさせられたから。かといって自分の中にこれにかなう意見や理論はなく、考える頭も言に出す勇気もなかった気がします。でも教育者にとっては四十人余りをまとめるこれほど便利

あんふあんてから あんふあんてへ

病めるときも健やかなときもーその6ー

いままでは、私はけっこう自分の思ったことを実行に移してきました。教育実習・教員免許取得・就職。それなりに努力はしました。でも周囲の理解・協力があつたからできたのです。当時はなにかば当然の権利だ！ぐらいいに思っていたのですけれど……。ずいぶん傲慢なヤツだったな。

憲法などを引き合いに理論武装して夫に私の要求をつきつけるのです。学生時代にさんさん、「男女平等論」を私に聞かされ賛同していたてまえ。

「俺はおまえに働いてほしくない。俺はつかれて帰ってきて家事までやれるか！」とは言えなかったのでしょう。私も言えないように外堀をうめ、実力行使つきでせまりました。自分のやりたいことをするために必要な方法ですが、やりすぎちゃったようです。相手の状況や性格をつかんでほどこに。それから一番大切なのはゴリ押しをしない。相手の自主性を尊重する。これができなかったんです。それから相手の逃げ場を残しておかなかったのが最大の不覚！！

会社で嫌いな彼氏にとつて家もきゅうくつな所だったから立つ瀬がありません。よく浮気をしなかつたもんだ。幸せなことに、私はそう思っています。でも浮気できるくらいだったから……とも思いましたが。

とにかく、ふたりの問題はふたりで解決するしかないのです。お互いの自主性を尊重しあいながらくればいいんだけれどこれが本当に難しいのです。

覚えていますか チエルノブイリの 原発事故を！ その41

ガンバレ！！原発コーナーの連載

中野

七年前前に共同保育に参加していた頃、あんふあんてを読んでいました。今回の久しぶりの赤ん坊の誕生で仕事もやめて悶々としていたところ、なまめのいしんぶん誌上で、あんふあんての名前をみつけ、なんだかなつかしく思い、存在を再確認しました。チエルノブイリ事故のその後もずっと連載されているんですね。マスコミは意図的にしろ、そうでないにしろ、起きたことをどんどん忘れさせるから、あんふあんて、ミニコミで検証していくことはとても重要で必要なことだと思えます。

私は原発の存在する地球に未来はないと思っています。毎日、毎日たくさんのおもちゃ（これはウソです）を出し、そのウソを処理する安全な、完全な技術もない。それに、原発は「デブコ」のパンフにあるような巨大なコンベーターを数人の社員がこぎのりな部屋で操縦するのはなく、何百人もの下請労働のおじさんたちがぞうきんを手に支えているのが実態なんです。そのおじさんたちはまじれもなく被爆します。事故が起つても奇跡的に起らないでも原発は、いのちとは反対の極にありますが、生きるか死ぬかの選択でもあると思います。とはいえ、くやしながらそんな



方法ってないですよ。四十あるはずの意見がわずか六になつてしまふのです。もちろんその中でしっかりと話し合い自分の意見が消化されていけば六でも四十の価値はありますが、今の現場ではそれほどの時間的余裕は無いわけ、私の様な班にいてもいなくても良い様な存在が出来てしまふのでしよう。でも本人の努力が足りなかつたと言つてしまえば終わりますが、十把ひと絡げの今の教育、そうそう無心に信じると危ないと思えます。

でも、今になつてやひとり一人では何事も出来ず、グループを仲間を探しているわけでおかしなものですね。あんなに嫌うものを求めるなんて。だけど形が少し違ふ様に思えます。誰か中心になる引力的強さや熱に集まるのではなくそれは以前と同じ一色に染まつてしまふものだからグループだけであくまでも個人である個人同志の集まりみたいなもの、共感と同時に反発も感じて良いグループ、出来ないものでしょうか。人生八十年として残り三分の二の時間に、そんな人との出会いがあると思っています。

きつと松戸の方々、そんな出会いがあったのでしようね。やはり自分を魅力的に磨くのが先かしら。

五月号の

さんの記事を読んで

黒磯市

コドモは天使だなんて誰が言ったのか。奴らは悪魔みたいな一面を持つてると、私は思っています。へかつては自分もそうだった訳ですが、奴らは大人の足元を見ます。その動物的カンには絶妙です。こつちが妙に良心的、自省的な母親になつてしまふと、奴らはすぐにその弱味につけ込んで来ます。

だから私は、母親つてのは時として非常に感情的であるべきだと思います。まあTPOも考えず年がら年中感情的であるのもコドモにとつてはいい迷惑ですが、ここぞという時に思い切り感情的にぶつかつておかないと、奴らは大人をなめてかかつてきます。演技して大人を自分のいいように操作しようとするわけですよ。

理性的は母親ほど、奴らの演技に操作され易くなる展開です。たまーには、どんな責めて、グログロ泣きながら白状させて「ごめんない」と無理やり言わせるのもいいんじゃないでしょうか。私ならそうします。そういう過程で意外な真実が浮かび上がってくるかもしれません。

ちなみに、私の母親はとても理性的な母親だったの、私はとても淋しかった。私も人並に母親にひつぱたかれ、思いきり感情的に叱られる経験をしてみたかった。そうされることによつて、ドロドロとした愛情を感じたかった。もしかすると、さんの娘さんは、「きつとお母さんは私のことなんてどうでもいいからあんなに落ち着いてるんだ」と思っているかもしれない。私がそうでした。



原発電気も使っています。昨年一年間は使わなかったのですが、今は、集金に来る青年やおじさんに「はやく原発やめてね」と声をかけることにしています。

子ども一人の時は、数年後のことなど想像もできなかったけれど、二人めとなると少しは余裕ができて地について考えられるようになったような気がします。子どもは一日一日が変化に満ちていて、それに目をうばわれてしまふとまわりのことに気持ちが向いていかなかつたりするけれど、その子ども（を）含めて全ての人間あるいはいのちあるもの（を）とりまくもの事に注意していかないととり返しがつかないことになつてしまふと思います。

トトロのドンダリのおみやげは大歓迎だけれど原発は絶対に子どもたちへのおみやげにはできません。

原発コーナーの連載への反応が少ないうちのこと、残念ですが、私は応援しています。再びの「あんふあんて」ですが、これからもよろしく。

夫婦別姓について 私の場合 狭山市

昭和五十九年十二月、結婚式はしたけれど籍は入れず。名前はじゃんけんぽんで決めたかったけれど、アイボリーはいやだと言った。六十年秋、妊娠。籍のことは全く忘れてしまった。六十年二月、卵巣の腫瘍がわかってしまった。救急車で会社より運ばれ手術。(六ヶ月のおなか)その時、まだ籍を入れてなくて医者に笑われてしまった。六十年春ごろ、しかたなく籍を入れる。私の勤めている会社では、いつ名前が変わるかみんな楽しみにしていた。しかし、入籍しても会社へは届を出さずに、澤渡(さわと)で給料ももらい、税も払っていた。子どもはさすがに嫡出子だとか認知だとかあるし、差別されるのがいやだし(これは私の心の中に差別する心があるからだろうな)、めんどろなので入籍という型を出産前にとった。子どもがいなければ、きつとずっと籍は入れなかつただろう。籍を入れないと遺産相続のとき損なんだろうなとも、考えた。アイボリーの名前がもつとかわつた名なら、そちらをすぐ選んだかもしれない。今でも、通帳などお金にからむもの以外は澤渡にしている。やっぱり、土屋より澤渡の方が好きなんだ。



入園ーウチの子の場合はー 横浜市

幼稚園の入園は、慣れるまでが大変だという話は聞いていたけれど、実際、ウチの場合も、この四月・五月はとてもしんどい思いをしました。

昨年の八月に二人目が生まれ、二人の子育てに息切れもしていたし、近所の仲よしの子が幼稚園に入園するというので、それなら一緒にという軽い気持ちで、上の子を入園させることにしたのです。けれども、ウチの長女の場合は、十二月生まれなのに、三年保育にしたので、自立の面や精神面で負担が大きかったのです。

初めの一週間はとてつもない子で通園してくれたので、こちらが拍子抜けするくらいでしたが、二週間目頃からは、何だかトイレが近くて変だなど思っているうちに、トイレと居間をまるで往復しているくらいになってしまいました。(一時間に十・二十回くらいでした。)

どうやら、神経性の頻尿になってしまったようです。外出している時や、何かに熱中している間は平気だったのですが、神経性のものだと判断しました。

往復するほどトイレに行っても、出るものが出るはずもなく、ついには「出ないよ」と泣きながら三十分もトイレにすわっていたり、親の私もホントに参りました。こんなことなら、幼稚園に入れないでよかったと後悔の毎日でした。

幼稚園に電話で相談したところ、園でもたびたびトイレに行っている様子でしたが、先生の方は慣れたもので、「心配するほどのこと

子離れ出来るかなー息子の登校拒否からー 菊池

おとなしくまじめにバカが付く程の息子は、保育園・学校・学童保育クラブの生活の中で先生達に怒られた経験がない不幸者です。家の中でも兄弟ゲンカ経験も少ないまま良い子を通していたらしく、小三の二期期には登校拒否となつたのです。

九月中旬から体調を崩し、とうとう休み始めた二日目に私は「登校拒否」と直感。理由を聞いても全然話をしません。友人から借りた「親業」(トーマス・ゴードン)を参考に話しかけたら、ボツボツと学校に行かない理由をやつと話し始めてくれました。原因は保育園や学童クラブ、三年生からクラスも一箱になったY君とのことでした。Y君の方ではいじめているつもりはないらしいが、口調も荒々しく自分の思い通りになるまで強引だし、命令されて断ると「なぐる、ける」をやる。息子の方はいじめられてると感じ耐えられなくなつたそうです。今思えば、いろいろな形で子どもからは信号を出していたのにキャッチする事が出来ず「いやならはいや」と言いなさい」と両親を始め教師や学童の指導員まで皆が同じ答え方をしていたのです。大人側の言うことはわかって、Y君には言えない息子はモンモンと過剰にいたのでしよう。最後に「ボクがいやだと言った方が良くないと思うけれどどうして言えないんだ」と言う結論まで持っていた事を知った時、長い間理解してあげられずかわいそうだと思ひました。それと同時に子育てに自信があつた私はすごい挫折感に落つたのです。

ではないので、お母様はゆったり構えて待つてあげて下さい」とのこと。それに同じ年少組の中で、同じような子どもがもう一人いるというお話で、少しホッとしました。

友達や知り合いにも、話を聞いてもらったところ、みんな入園の時はいろいろあつたようで、とても力づけられました。こんな時は経験談が一番ありがたいですね。

その後、連休に私の実家に一週間滞在し、すっかり遊び相手をしてやっていたうちに、だんだん症状が軽くなり、ほとんど治つてしまつたようです。

連休の終り頃、今度は本当に病氣(気管支炎)になり、またまた一週間も休んだので、幼稚園には再び行き始めて、まだいくらかもたつていないのですが、今のところは、大丈夫みたいです。

また、頻尿になるかもしれないので、長女にはけつこう気を使っていますが、慣れてくれば楽しく通ってくれるかもしれません。

私の方も、初めての集団生活で、ちゃんとしなくちゃ(させなくちゃ)という気負いがあつたけれど、いろいろあつてすっかり肩の力が抜けました。そして、親も子ども少しラクになつたみたいです。私の緊張も子どもにも悪く影響していたのでしよう。結局、子どもの問題は実は親の心の問題でもあつたりするみたいですね。

子育てで何か壁にぶちあたる度に、自分の未熟さを思い知る私です。

子どもの入園ストレスで悩んでいる皆さん、一緒にがんばりましょう。



私の働く理由ーその2ー 東村山市

自分の子どもとて一個の人格であり、人間として対等な関係を築きたいと思うが、四六時中顔を突き合わせているとどうしても子どもを私物化してしまいがちである。これは、お互いの自立にとってマイナスである。

昔から「可愛い子には旅をさせろ」というが、子どもは社会の中でもつともまれて育つてほしいと私は思う。たしかに今の保育園・幼稚園・学校には管理の強化等様々な問題がある。だから行かせないのではなく、そうした問題を自分の手で感じて、自分の力で乗り越えて行けるようになる。もちろん、これは、親の助力を必要とするだろう。

親もまた、働いている限りは社会的諸問題に直面しており、人間関係の中でもまれていく。親もまたたかっているが、子どももまたたかっている。その意味では、親子といえども同志的な関係である。私はこの関係がたまらなく好きだ。「今日一日頑張ったね、明日もまた頑張ろうね」そう励まし合い、信頼し合いながら、お互いに成長してゆくものではないだろうか。

平日あんふあんてに参加して、うららかな春の日差しをあびて暖かい日でした。浜離宮ってステキな所、一つの森の様に都会の中とは思えないくらい。植え込みに雑草を残してある所がすてきだし、野鳥もたくさんいる様です。ここでお弁当、みなさんいろいろな事しているんだなんて、ちょっと勇気づけられました。子育ての先輩方の「何人子どもがいても、一人一人みんながうのよネ」に、なんだか安心した気持ちになりました。

水上バスで浅草まで、さわやかな気持ちになれました。船で子どもが騒いだら、なんて心配はいらなかったようです。子育ても手が離れたおばさま方の団体さんはそれ以上。あと十年もすれば私たちもあちらの仲間入りかしらなんて話も出て、あつという間に到着。仲みせをぶらぶらし浅草寺でハトと遊び、観光ハトバスルートも子連れだとまた楽しです。新しい人との出会いも、ちょっと足をのばしてみてもステキな事です。子連れハイキングの話も出ていましたが、もし実現できたらいいなと思っています。(千葉)

●四月十九日、十一ヶ月の息子と、平日あんふあんてに参加しました。以前から乗って見たかった水上バスを楽しみに出掛けました。ラッシュの電車を降り、久しぶりの都心にキョロキョロしながら浜離宮へ。総勢大人七名、子ども六名のメンバーです。深川あんふあんての活動の話や子どもが小さい悩みとかイロイロ出た後、福野さんの四人のお子さんの話から、避妊の話で盛り上がりました。

水上バスは約三十分。確か五百二十円くら

いだったと思うけど、船は新しく大きく、リッチな気分を味わえました。数日前から雨で外に出られず、ストレス大だった私たち親子（どちらかといえば親の方が）は、充分エンジンジョイしました。ただ、幼い子連れの集まりはどうしても子どもに気をとられせつかくの人の話をきくと聞くことができないのが残念。夫に協力してもらったり順番で託児をしたりして、大人だけで腰をすえてじつくり語り合う機会を持ちたいものだと思います。

今月は四月号掲載の武蔵野の新しいグループにも、電車とバスを乗り継いで顔を出しました。そこで「アリス」という素敵な実録映画に出会い、そのグループの代表の佐藤雅美さんのパワー（なんとその日、五才の男の子を連れ三ヶ月の子をベビーバスケットに入れて抱え、映画の上映の為に飛び回っていたのです）に感動し、大きな刺激を受けました。(安部)

へ情報コーナー

★左利きについて教えてください
娘は三才の現在、食べるのも描くのも全て左です。肩たたきの真似ごとをしてもらうと左手の力の方が断然強いのがよくわかります。でも、世の中万事右利き用にできています。自動改札機一つみてもわかる通り。実際娘が二才の時やっと思つた左利き用のはさみはデザインを選ば余地はありませんでした。本来左利きは十人に一人位だそうです。七、八割の人は矯正するようです。

娘は逆子で大きく生まれる時かなり苦労したせいで、はじめ両手ともだらりとして動き

ませんでした。左手はまもなく動くようになりましたが、右手が動いたのは三ヶ月以上たってから。今でも右手の方が上がり方が少なく握力も弱いようです。そのせいで左利きになったのかは不明です。

ある程度大きくなってから自分の意思で右も使えるようにしたいと思っても、それから変えるのは難しいのでしょうか。左利きのお子さんがいる方、ご自身が左利きの方、体験を聞かせてください。

★二才女児と四才男児用衣類譲ってください
いつもお兄ちゃんのおさがりが多いので、女の子の可愛い服など大歓迎。送料はこちらで負担、内容に応じてお礼も考えます。本などもあつたらお願い。夕方なら確実にいます。

★「ペンボスタ子ども共和国」を監修した
村田栄一さんを囲んで話しを聞こう！
四月にこの映画をみて、こどもが置かれた状況によっては、こんなに生き生きと力を発揮することを再認識。日本の現状は……というわけで映画製作の裏話や、小学校の教師であった頃の話、その他切り口鋭い話を期待！

日時 7月11日(木)AM10時~12時
②PM7時~10時(2回あり)

場所 文京区役所大塚出張所2F和室(丸の内線茗荷谷駅下車5分)子連れ可
参加費 500円(タッキー付)ピッピ主催
連絡申込み 岸
※映画の方も銀座シネバトス3にて7月14日から20日まで再上映される予定です。